

そうぜんじ便り

19世 俊諦和尚筆

第150号

令和4年 秋彼岸号

臨濟宗 宗禅寺
建長寺派

高井正俊
高井和正

羽村市川崎2-8-20
TEL 042-554-1276
FAX 042-578-3525

コロナは収まりませんが、一年に一度の川崎のお薬師様の日を迎えます。
法要と数珠回しを行い、皆さまのご健康をお祈り致します。

川崎一本木堂薬師如来 疾病退散祈禱法要

雨天決行 令和4年10月2日(日) 午後3時より

■薬師堂にて 御詠歌奉詠 コロナウイルス退散法要
■本堂にて 百万遍数珠回し

※本年もコロナの情勢により、各種屋台と奉納舞台は中止となります。
※彼岸中(9月20日〜26日) 毎朝6時〜7時 坐禅会を行います。

宗禅寺薬師堂縁起

薬師如来とは正式には東方薬師瑠璃光如来といわれ、インド古代の言葉、サンスクリット語で「パーイシヤジャグル」、「医療の大家」という意味でその名の通り人々の健康を司る仏様です。日本では古くは飛鳥時代からその信仰を見ることができ、病気の平癒を願い、日本各地で祈禱が盛んに執り行われてきました。

宗禅寺薬師堂の歴史はお寺の歴史よりも古く、多摩川に流れてきた一本の樺の大木から建立されたとの伝承があり、「川崎一本木堂薬師」として多くの村人に身宮安泰・当病平癒の現世利益を授け、特に眼の疾病には利益があり、村のお薬師様として多くの信仰を集めてきました。

また、お堂自体は室町年間の再建と云われており、市内で一番古い建造物である可能性が高いです。

お薬師様の真言は「オン・コロコロ・センダリ・マトウギ・ソワカ」です。お参りの際にお心の中でお唱えして、お薬師様とご縁を結んでいただければ有難いです。

劇団水族館劇場

宗禅寺公演・ご報告

昨年引き続き、劇団水族館劇場のお芝居が彼ら自身の自作による特設舞台にて行われました。

三月末から建て込みのため、羽村にて生活を始めて三ヶ月と少し。今回は、座長の桃山邑さんの病気による公演日程の変更や、満員御礼による追加公演もありましたが、全十

四回の公演にて延べ一四〇〇人以上の皆様にご観劇をいただきました。

近隣住民に皆様方におかれましては、住宅街に耳慣れない芝居の稽古や公演による騒音もあり、御迷惑をおかけしたことお詫び申し上げますと共に、寛大なるご対応をいただきましたことを深く感謝を申し上げます次第です。

二年目の羽村での公演を終えて、水族館劇場から劇場設営棟梁の秋浜立さんにご寄稿をいただきました。また、座長の桃山邑さんの「水族館劇場とは何か？」も連続掲載をしています。皆さま方の劇団へのご理解が深まっていただけだと思います。

水族館劇場

今年の公演を振り返る

水族館劇場・舞台設営棟梁

秋浜 立

思い起こせば昨年と違い、今年は宗禅寺の本堂で何度も何度も稽古をさせて頂きました。お釈迦様や諸仏やいろいろな人が稽古を見ていました。芝居を見ていました。水族館劇場劇団員の秋浜立と申します。

野外芝居『出雲阿国航海記』を宗禅寺駐車場で行わせて頂きました。場所を提供して頂いたお寺の皆様、近隣の皆様、そして見に来て頂いた全ての皆様、本当にありが



ありがとうございました。

とうございました。私は劇場の建て込み棟梁をやっているのですが無事に劇場は跡形もなくなりました。また役者としては今回バサラモノの貴族の役でした。「おじやる、おじやる」と叫びました。ご覧になられた方に覚えて頂けたかどうか。それはさておき芝居自体は大盛況でした。ありがたいことです。ただその裏側では私たちにとって大きな事態が起こっていました。そのことを含め今年の公演を振り返ります。

今回は芝居公演だけではない様々な試みを行いました。劇場の隣には巨大な水車が出現しました。役者でも出演した千葉大二郎の野外アートです。その隣には学芸大学の古本屋「流浪堂」による古本市が開かれました。店主の二見彰は役者でも登場です。さらに劇場の周りは何枚もの大パネル写真で覆われました。故鬼海弘雄の写真展です。また特別イベントとしてクラウンパレードが開催、子ども達が笑っていました。また沖縄基地問題に関する公演や、出雲阿国がテーマの座談会、そしてお寺では公演日に坐禅会が毎日開かれたのでした。座禅をした後に芝居見物というのはなかなか出来ない体験だったのではないかと思います。正俊和尚は宗禅寺に水族館劇場を呼んだ理由の一つに「羽村から文化をつくっていききたい」とおっしゃっていますが今回の芝居と催しはその一助になったでしょうか。様々な催しを含め私達はあの場所で生まれたことを



羽村・福生の皆様、3ヶ月半、お世話になり

「芝居」ととらえています。去年はいわゆる芝居公演だけだったので今回は様々な試みが成り立ちありがたいことでした。人と人との縁をつくっていく。座長の桃山邑はそれを「座を建立する」とも表現しています。さて、その裏で起きたことを記します。その桃山邑が病に倒れたのでした。

私たちが劇団員は普段はそれぞれ別の仕事をしているのですが、仕事を離れて劇場作りや稽古に専念していくことを「全日（ぜ

んにち）」に入ると呼んでいます。三月末、私達がまさにその「全日」に入った日に桃山邑は倒れたのでした。それまで桃山も建築現場で働いていたのです。緊急入院でした。桃山邑は座長です。演出・台本です。建て込みや舞台美術などの全体を見ていたのも桃山です。病気はかなりやつかないもののように思いました。桃山が現場にいない中での建て込みや稽古の日々が続きました。そして桃山から、病は不治だということ、余



舞台設営棟梁 秋浜 立さん

命は長くない、ということをお伝えされたのでした。半年ということでした。水族館劇場は桃山邑が始めた劇団です。もし桃山がいなくなったら私達は水族館劇場をどうするのか？ そのことを突きつけられたのでした。劇場を作りながら、舞台を作りながら、稽古をしながら、話し合いました。そして私達は劇団を続けていくということを決めました。桃山は身体の悲鳴、薬の副作用に苛まされながらも台本を仕上げ『出雲阿国航海記』の幕を開くことができました。それは江戸、大正、現代と時代をこえて死者と生者が行き交う舞台です。ご覧になられた方は何を感じたでしょうか。

これを私が書いている現在、桃山邑はこの世界に存在しています。ですがこの文章を皆様が読まれるときは存在しているかはわかりません。しかし水族館劇場は間違いなく存在します。私達が継いでいくからです。ですがそのためには、あらためて水族

館劇場とは何かということをお、継いでいく者はしつかりととらえないといけない。自分の足元をみつめないといけない、と思います。なぜ水族館劇場は野外で芝居をやるのか。自分たちで劇場を建てるのか。私達は普段は別の仕事をしています。芝居自体で生活費を得ていません。国からの助成金ももらいません。何故なのか。水族館劇場はこれまで多く芝居をやらせてもらってきたのはお寺や神社でした。何故なのか。水族館劇場とは何なのでしょう？何故？何？がつかえません。今までは桃山が体現していました。その桃山がもうすぐいなくなるかもしれない。自分たちで考えなくてはなりません。今回の公演はその始まりでもありました。人は必ずいなくなります。だけど続いていくものがあります。もちろん全てはいつか消え去るとしても。そういうことを考えつつ問いつつ、これからも水族館劇場は続いていきます。その上で凄い芝居を作りたい、面白い舞台をお見せしたい、と思います。

今後の水族館劇場ですが、そのような話ができるといういなあという場をお寺が用意してくれました。九月の土曜講座です。水族館劇場を振り返る、というテーマでお話をさせていただきます。そして来年の年始には劇団のもう一つの顔「さすらい姉妹」が宗禅寺の境内で公演させて頂く予定です。路上芝居です。桃山台本です。本公演とは違

う面白さがあると自負します。そして来年の春、宗禅寺で水族館劇場本公演を行わせて頂きます。三度目の野外劇場を建てます。様々な催しも企画しています。そして桃山が師とよぶ盟友、翠羅白(すい らうす)が台本・演出を担当します。なので昨年今年とはまた違う水族館劇場となるでしょう。ですがそれは水族館劇場です。ご期待ください。そのころ桃山邑の状態がどうなっているかわかりません。だけれどもわからないけれどもどこかで見ていると思うのです。皆様のお目にかかる日を楽しみにしています。



2 役者徒党という誇り

水族館劇場に集う役者は職業藝術家ではない。最底辺の仕事をこなし賃労働で生活を贖う「此の世に用無き者」のひと群れだ。「演劇」業界にも「統治」システムのおこぼれ金にも色目も使わない。だから「プロ」と「アマチュア」の境目がわからない。あえて区別をつけない。だって入場料をいただいでいる以上、立派なプロジェクトじゃないの？ 製作費と収入の圧倒的な非対称は自己責任でしょ。最初から飯の種は芝居い



劇団座長 桃山 邑さん

いの場所です。いちばん楽しめる場所を経済的縛りのなかで左右されるのはまっぴら御免だ。すると水族館劇場は劇団ではないのか。芝居者が集まって一箇の舞台を拵（こしら）えるわけだから、紛うことなき劇団であろう。ただし数多ある凡百の劇集団と決定的に違う別のなにかを志向する役者徒党なのだ。

千葉大二郎は「水族館劇場が目指すのは演劇ではなく、世直しである。いわば芝居に擬態した百姓一揆にちかい」と云い放った。買ひ被りだよと謙遜しながら、言い得て妙と納得するじぶんがいた。ぼく自身「演劇」が目指す芸術的完成度には尾っぽを振らない。「反芸術」を標榜するアングラとも無縁でありたい。師と敬愛する翠羅白の曲馬館をアングラの極北と呼ぶなら在籍したぼくは、その領域に分類されるのかもしれないけれど。赤テントや黒テントより、歌舞伎や文楽、新派悲劇に憧れたぼくは、別の世界観でもうひとつの芝居の獣道を歩きとおして来たのだと思う。

すこし昔の話になるが、ある時期からパーマメントメンバーにサポートメンバーが混じり合い、集団自体の枠組が緩みはじめたことがあった。現場で指揮（決定権を持

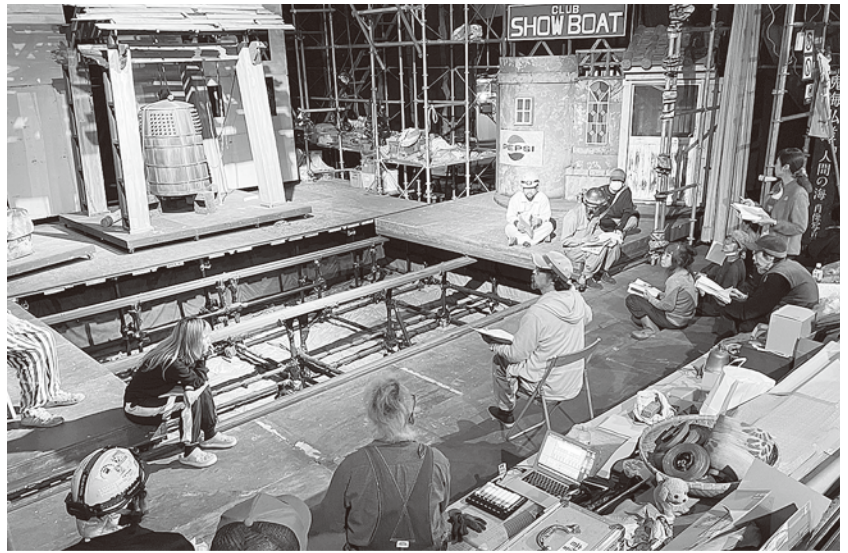


出雲阿国を演じた主演 千代次さん

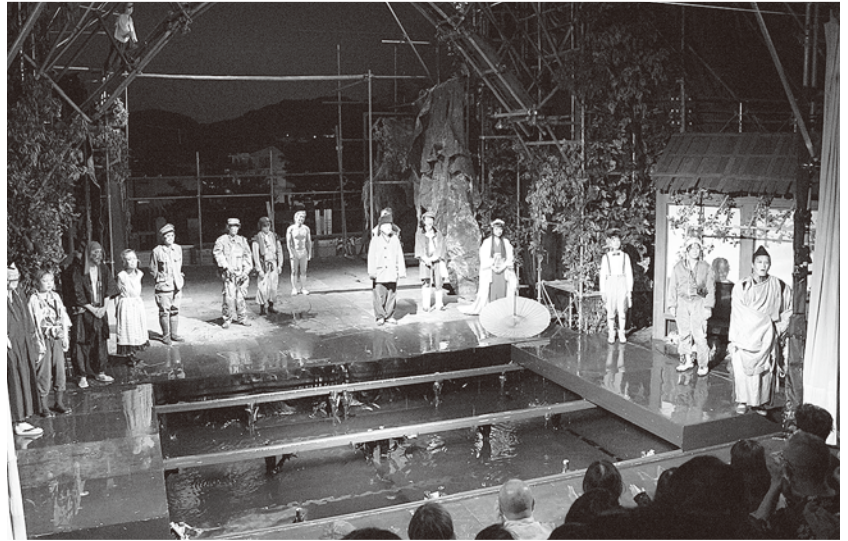
つ)をとるスタッフが劇団外の間人だったり、参画期間にばらつきがあったり。内部から、どこまでが水族館劇場なんだと疑問の声があがったりした。さもありません。幕が降りたあとの役者紹介で多くの横に、みたことない奴がいる（後でできた昨日は観客で来たけど打ち上げて誰かに出てほしいと囁かれ、モブシーンに紛れ込んだらしい）んだもの動転するよ。ま、それも芝居のうちと開きなかつたけど、それまでイメージしてきた集団とは、あきらかに別の潮流にのった立場のクルーが浮上してきたというわけだ。劇団を標榜せずプロデュース公演にしたら、という提起も再三うけた。けれどもぼくは領かなかつた。確信を持ってぬまに、この状態に可能性をみいだそうとした。そのころの演劇業界はぼくの直感とは真逆の方向へ流れていた。小劇場運動で名をあげた者たちのほとんどが集団の紐帯を解き、才能ある(?)個人の名を冠し

たプロデュース性に移行した。世に知られるほどに一枚岩だったはずの結束が才能の潜勢力によってランクづけられ、あるレベルに届かない者は退場を勧告される羽目に陥る。演劇にかぎらず音楽でもメジャーへの切り通しをくぐるときに必ず起きる試練だ。それこそが自然の淘汰かもしれない。

水族館劇場は才能で分別されてゆく劇団



内の関係性に与しない。クールな割り切りを自明としない。むしろ遠ざけようとする。演劇とは別のなにかを、才能とは別のなにかを探し求め、ちべたすれすれに身をかがめ、「当然の世界」に逆襲を試みる。生まれつきの天賦の能力は人それぞれ。仮設小屋を役者みずから組み上げてゆくような芝居の全行程には必ずその人が必要とされ



る局面が来ると信じている。とるにたらない下層の生を生き抜く者たちには、ここでしか歌にならない声があり、座付役者とは、かそけきその声を拾い歩く使命を帯びた立場の謂れにほかならない。

(次号に続く)



全ての撤収が完了し、お寺にごあいさつに来てくれました

AED(自動体外式除細動器)を お寺に設置致しました

いつも多くの皆様にお寺をご利用していただいております、必要性を感じていましたAEDを、このほどお寺に二台設置することとなりました。

ご近所地域の皆様にもご活用いただければと思います、建物外に設置できればと考えておりましたが、冬場に氷点下になった場合、機械の円滑な作動が期待できない場合もあるということ、建物内での設置となりました。

本堂に一台、裏のみんなの家に一台設置致します。もちろん、ご近所々に不測の事態の折には、お持ちになりご使用いただいで大丈夫です。

今回の、製品のメンテナンス維持を考え、リースにて契約致しました。AEDが活躍するような場面があまり多くありませんが、最低限の設備として設置したことをご報告致します。



羽村とうろう流し 実行委員会解散のお知らせ

毎年八月の第一土曜日の夜に多摩川で開催されてきました羽村とうろう流し。ここ数年、コロナの影響で開催しておりませんでした、ここに突然ながら実行委員会の解散が決定致しまして、四十年近くに渡る歴史に幕が閉じられました。

毎年とうろうをご購入いただいで下さった皆様方に厚く御礼を申し上げますと共に、過去、実行委員として携わって下さった全ての皆様に深く感謝を申し上げます。

なお、とうろうは来年以降、何らかの形で活かしていればと考えております。また、羽村でとうろう流しが行われていたことは後世に伝えていくべき文化的な財産であるとも思っています。

ひとまずはお役目を終えたとうろうですが、水の町羽村にあつて、貴重な存在であったという想いがあります。今後ともよろしくお願い致します。

宗禅寺みんなの家 工事完了・完成しました

平成二十三年、裏の第二駐車場のすぐ隣の土地をお寺が購入致しました。古い平屋の建物がございましたが、このほど増築とリフォームを施しまして、宗禅寺みんなの家として生まれ変わりました。



八畳、四畳半、六畳と三つのお部屋があり、トイレやキッチンもございます。

すぐ隣に駐車場もございます。地域関係者の皆様のサークル活動や寄合など、様々なことにご使用いただけますので、ご使用に関しては、お寺にご相談下さい。みんなが集まれる場所として地域で活かしていたけると大変有難いです。

文庫長だより 島田 秀男

小学生の頃、夏休みになると近所の友達二、三人でたびたび多摩川に魚釣りに行きなりました。

竹竿につけられた釣り糸のサキにある針に、川底の石にはりついた川虫をつけ、水中に入れ前後に動かしながら流し、魚を釣る方法でした。魚が餌を食べるとブルブルという小気味よい手応えがあり、その感覚は今でも思い出します。

二〇から三〇匹も釣れる頃になると西の山の向こうに入道雲が発生し、そろそろ帰らないと雨が降るぞと行って帰り支度します。水に浸かっていた足はだるく、堂坂を登るのに一苦労であったことを思い出します。多摩川では泳ぐこともしましたが、魚釣りのことが一番印象に残っています。

釣れる魚は、アブラハヤやオイカワなど雑魚ばかりでしたが、多摩川では鮎釣りが昔から盛んに行われていました。『西多摩村誌』には、「本村を貫流する多摩川は古来鮎を産するを以て名有り、殊に、羽村の鮎なる名声江湖に高く、夏秋の候に際し都人士本村来つて鮎漁を試み、一日の清遊を楽しむ者陸続として多かつた。」といえます。その理由として、玉川上水の羽村堰が設置されていたため、多摩川を遡上してきた鮎が堰下にことごとく集まってきたためであると記されています。

羽村堰は、鮎の太公望たちには絶好の場所であったようです。当時堰周辺には、鮎を名物に出す料亭や宿が立ち並び活況を呈していました。

鮎漁の歴史を見ますと、江戸時代初期から「御菜鮎上納」として、幕府に鮎が献上されてきました。産卵のために川を下る鮎を捕えて、数と大きさ（一二センチ以上）をそろえて、指定された村に集積されました。籠に入れられた御用鮎は、夕方村を出発し、夜通しかけて江戸に運び翌朝に上納されました。

多摩川上流・中流域の御用を勤める村は、江戸中期には四六か村に及び、「御菜鮎上納」から「上ヶ鮎」と呼ばれるようになりました。

大正期になると村山貯水池へ送水するための玉川上水第二水道完成により、多摩川の全水量が上水に流れ込むようになり堰下流には僅かの水量となったため、鮎の漁獲高は減少し往時の盛況は見られなくなりました。

多摩川の流れとともに伝承されてきた先人たちの暮らしを鮎漁以外いくつか拾い出してみたい。

七月のお盆のときは、家の中に盆棚を飾り、仏様をお迎えして、一六日の夕方には仏様が再び墓地に帰るための送り火をします。翌日盆棚をとり払い、棚の周囲を囲った竹やなす、きゅうりの牛馬などチガヤの縄でしばって川に行き流しました。また、お産で

死んだ人は、川に布をかけてそこを通る人に水をかけてもらったり、花をあげてもらったりしたといえます。ともに「川施餓鬼」といわれる行事です。

明治後半から、大正・昭和初期まで、養蚕が盛んに行われ、養蚕日本一と自負した羽村では、春咲きになると蚕室の大掃除をし、養蚕用具を車に積んで川に持って行き洗っていました。小作の多摩川橋下、阿蘇神社下、大正土手下、羽村堰下、川崎河原などよい洗い場であり、網やむしろ、竹製のコノメなど河原の石の上に一面に干されていたようです。何日も蚕具洗いが続いて河原がとても賑わい、春の風物誌となりました。

現在の多摩川では、子供たちが川遊びをしたり、泳いでいる姿を見ることはできません。たまに鮎釣りをする人を見かけるぐらいです。

多摩川を利用しての行事で唯一残っていたのが、「羽村灯籠流し」でしたが、本年を持って終了することになりました。「羽村灯籠流し」は、昭和五八年に第一回が開催されてから三七回にわたり実施されてきました。向山と一本杉、男女が多摩川に灯籠を流すようすが描かれた版画の白黒のポスターが、毎年七月になると張り出され、毎年同様の図柄かと思いましたが、今はなぜか懐かしい気がします。

《参考文献》

『羽村町史』『福生市史上巻』『はむら民俗誌』

年忌にあたる御霊位

コロナ感染の急拡大もあり、どのようにご法要を行うかお悩みの方もいらっしゃるのではないかと思います。宗禅寺では、お寺のほうから人数や会食の制限は設けませんので、どのような形のご法要にも対応致します。ご供養はご自宅・墓前・塔婆のみの墓参でも可能ですので、まずはお寺にご相談下さい。真心を形に表すことがご供養に繋がります。

◆年忌霊位(本年十月～来年一月まで)

一周忌 令和三年～四年御逝去

御命日 故人御芳名(敬称略)

令和三年	十月十三日	長谷川 ヨシ
十月二十日	石川 静枝	
十月二十二日	清水 みえ	
十月二十四日	新井 富雄	
十月二十九日	山崎 規矩二	
十一月二十八日	尾田 正之	
十二月一日	高橋 弘子	
十二月三日	高橋 幹夫	
十二月十二日	宮野 哲夫	
十二月二十七日	中根 毅	
令和四年	一月五日	佐藤 英夫
一月十八日	及川 真紀子	
一月二十五日	島田 君江	
一月二十七日	柳澤 久留美	
三回忌	令和二年～三年御逝去	
令和二年	十月七日	中野 千代子
十月十四日	武田 修司	
十月二十三日	設楽 公子	
十一月六日	眞 豊子	
十一月十六日	瀧澤 タカ	
十二月十八日	島田 光枝	
十二月二十一日	志村 光枝	
令和三年	一月七日	新井 欣二

七回忌

平成二十八年～二十九年ご逝去

一月十二日	島田 敬輔	
一月十五日	坂和フミエ	
一月十六日	高橋 森夫	
平成二十八年	十月三日	木村 保
十月四日	古川 末男	
十月七日	初谷 茂	
十月十六日	渡邊 敬子	
十月十九日	山崎 マサ子	
十一月十八日	武政 光子	
十二月五日	中野 澄枝	
十二月十四日	小林 正子	
十二月十四日	古川 結	
十二月二十八日	雨倉 孝雄	
十二月二十八日	後藤 茂雄	
平成二十九年	一月四日	中野 裕久
一月七日	島田 道江	
一月二十七日	中根 英治	
十三回忌	平成二十二年～二十三年ご逝去	
平成二十二年	十月十日	宇田川 泰治
十月十二日	市川 一昭	
十月十四日	中根 文夫	
十月十七日	松本 二郎	
十月十九日	北村 清子	
十月十九日	島田 好美	

十七回忌

平成十八年～十九年ご逝去

平成十八年	十月四日	中根 ウメ子
十月十七日	飯島 好男	
十月十九日	横田 知子	
十月二十六日	市川 コト子	
十月三十日	吉川 和子	
十一月十日	鈴木 孝吉	
十一月十六日	渡邊 修	
十一月十七日	島田 実	
十一月十七日	加藤 キミ子	
十二月二日	岡部 作市	
十二月七日	雨倉 年明	
十二月八日	中野 ケサト	
十二月二十六日	中里 栄一	
平成十九年	一月一日	近藤 フサ
一月二日	田村 瀧雄	
一月四日	佐藤 昭廣	
一月十六日	北村 義廣	
一月十七日	秋山 康一	
一月十八日	金原 敏男	
一月二十日	中野 勝衛	
一月二十一日	村野 唯男	
一月二十三日	田中 廣助	
平成二十二年	十月九日	波田 野ムメ
十月十七日	田中 國子	
十一月十七日	鈴木 忠吉	
十一月十七日	小尾 律子	

二十七回忌

平成八年～九年ご逝去

平成八年	十月四日	小林 直美
十月二十九日	滝田 忠吾	
十一月二十六日	石川 雅治	
十一月二十七日	中野 武雄	
十二月二日	杉山 久雄	
十二月七日	内田 五三男	
十二月十一日	早川 由雄	
十二月三十日	高橋 良子	
平成九年	一月六日	横田 カツ
一月十五日	新井 澄江	
一月二十二日	鈴木 スギ	
一月三十一日	伊藤 健二	
三十三回忌	平成二年～三年ご逝去	
平成二年	十月十九日	新井 長吉
十一月十一日	原島 耕作	
十二月八日	大野 さと	
十二月九日	矢ヶ崎 喜代子	
十二月十九日	雨倉 八郎	
十二月十九日	和田 章一	
平成三年	一月二十一日	譲原家

・朝のおつとめの時、お経を唱え御供養をしています。

正俊閑栖未完成日記

お盆の行事も無事終わりました。コロナ陽性者が爆発的に増え、予定されていたこと次々と中止。寺に依頼されていた鎌倉で「こや」の百人合宿（二泊三日で子供と学生）も中止。残念と同時にホッともしました。隠居の身のありがたさを日々かみしめています。心身健康です。

（六月途中から）

- ミスミ工務店 西駐車場入り口アスファルト、玉石土止め。さっぱりきれいに。土曜坐禅会十人。 6/18
- ミス酒コンテスト 日本中の美女二十二人 写経と坐禅。客殿と本堂で。水族館劇場公演打ち上げ。エルムンドのお弁当で打ち上げ。四十人 6/20
- 御詠歌講練習十五人。写経会十八人。 6/21
- 福生六小八人お寺探検に来る。五時、総代会お盆会議。終了後懇親 6/22
- 朝の坐禅、順調に。毎日続けても色々だが、気づきたくさん。 6/23
- 鎌倉禅研究会（蓮沼さん、鈴木大拙。ほ

うたんさん、大休正念）四十人参加

- 建長寺調査員の鈴木佐先生と佐久・別所方面へ一泊二日。別所温泉中松屋さんで安楽寺ご住職夫妻、東城さん五人で一献。土井康子おかみと旧交を懐かしむ。鈴木さんの名ガイド驚嘆。 6/24〜25
- 横須賀生涯学習センターで、本郷和人先生の「頼朝以前」拝聴。うどん教室、久し振りに開催。 6/27
- 鎌倉・鯉之介で、高橋秀栄・ホータン・岡倉素子さんと暑気払い。 6/30
- 六月の来山は千百七十人でした。水族館劇場公演、合せての坐禅会もあり、なかなか盛況でした。
- （七月）
- 健康体操参加者の皆さん十六人で、本堂の掃除・ガラスみがき、感謝 7/1
- 宗禅寺便りの発送作業。鎌倉で「こや合宿打ち合わせ」六人。土曜坐禅会。多忙。 7/2
- 朝粥坐禅会 終了後にお盆施餓鬼棚の組立てして下さる。例年ながら、助かる。水族館劇場、撤収の挨拶に来山十五人。皆さん清々としたお顔。無事終了。

- 鎌倉禅研究会 大沢泉先生の講義、本郷先生休講でイス坐禅を行う。なんと六十人の参加。反省会十八人で 7/7
- 護持会十三人でお盆掃除。リアルで「こや」。土曜講座（和正住職、早川大介先生）土曜坐禅会。少し疲れました。 7/9
- 写経の会 終了後お盆のお経。三時、大西・上田来山。広島の「不滅の灯」の相談。 7/11
- 鎌倉・松ヶ岡文庫で「鈴木大拙忌」。大陸でアトリエノア田辺さんに会う。 7/12
- お盆の朝坐禅会始まる。七人も来、びっくり。十六日まで毎朝。 7/13
- 禅林寺施餓鬼法要、十一時 7/13
- 一峰院施餓鬼法要、九時半。禅福寺十一時。 7/14
- 宗禅寺施餓鬼 十時集合支度。十一時福生長徳寺施餓鬼。当山十二時より受付、御詠歌奉詠、二時施餓鬼法要。僧侶十人。片付けして客殿で御苦勞さん会。総代さん薬師講で。 7/15
- お盆の始まり十三日に、お墓に御先祖を

- 迎えに、十六日には御先祖様をお墓にお送りに来て下さる方々、御家族を多くお見かけしました。ありがたいことです。気持ちに表すこと大切！
- 砂川・林泉寺施餓鬼。一時。 7/17
- 小川隆先生『禅僧たちの生涯』読了。久しぶりに吉村君の万藏へ淑子と。 7/17
- 横田南嶺老師『禅と出合う』読了。四時、てらこや委員会勉強会、全員で。 7/19
- 寺ヨガ、本堂で二十人なかなか壮観。写経の会、客殿で一時より。 7/21
- 建長寺でお世話になった葉貫先生の薫奥様から多大な御寄付を頂戴する。 7/21
- 勝又浩『山椒魚の忍耐——井伏鱒二の文学——』読了。深い感銘を受ける。 7/22
- 梅林棟梁父子。木製机・本箱三、製作持参。奥の部屋キレイに片付く。本堂でアロマヨガ、いい香り漂う。禅センターで新聞サロン六人。七時半から禅堂で坐禅会。コロナに負けず。 7/23
- とうろう流し 本部委員会の方六人、物品を宗禅寺に持参。お金の清算も、これで羽村とうろう流し終結。 7/31

- 七月はお盆もあり、三一〇〇人の来山でした。コロナがあっても寺参りの方は多いです。
- 〈八月〉
- 寺務室へ光通信工事。合せて物品等の片付け、きれいになる。写経会。 8/1
- スポーツセンター（コロナワクチン四回目接種。発熱も何もなし） 8/3
- 鎌倉てらこや百人合宿、中止となる。寺ヨガ二十人。裏駐車場、草とり、雨で楽しかったので一日で終わらす。 8/4
- 渋谷・松濤美術館。ユーロススペースで香港の映画。和光で眼鏡直し。寿司幸で夕食。久しぶりにゆっくり。 8/5
- 朝粥坐禅会七人の方々と。 8/7
- 八日から三日間。午前中のみだが、夏休みリアルてらこや。新聞教室、落語、読みかせ、水遊び、勉強など。実にいろいろ。食事作りも。一二人。 8/8
- 鎌倉から稲毛美穂さん来ル。ルリ・カノ遊んでもらう。夕食は万藏で。 8/8
- 客殿で写経の会。本堂では南京玉すだれの練習会。寺を有効に活用。 8/11
- 勝又浩『鐘の鳴る丘』読了。戦後という時代、忘れていたものは？ 8/12

○越生・正法寺施餓鬼法要へ。十一時。台風通過中なるも、坐禅会に五人。 8/13

○小川・円光寺施餓鬼法要へ。十時。 8/14

○土曜講座（和正和尚、西川史晃さん、鈴木孝庸先生） 8/20

○鎌倉禅研究会（鈴木佐さん、高橋秀栄先生）

●今年の夏も、どうやら乗り切ったようです。コロナ・ウクライナ・香港、世界もどんどん変わっていきませんが、自分の心をしっかり保つていきましょう。お寺の活動を活用して下さい。



土曜講座のお知らせ

地域の歴史や文化を通して、時代をみる眼を養っていきます。お茶代三百円。予約不要です。お気軽にご参加下さい

◆第七十回 九月十七日(土) 十三時～十六時

「狭山茶のこと」

埼玉県茶業研究所

専門研究員 高橋 淳先生

◆「水族館劇場の公演を行うって」

劇団水族館劇場・舞台設営棟梁

秋浜 立さん

◆第七一回 十月十五日(土) 十三時～十六時

「沖繩の五十年と辺野古」

辺野古県民投票の会元代表

一橋大学大学院法学博士課程

元山仁士郎先生

・「議会と墓地」

福生市市議会議長 清水 義朋先生

◆第七二回 十一月十九日(土) 十三時～十六時

「木々の不思議を探る」

元東京学芸大学付属小金井中学校教諭

橋上 一彦先生

・「水く生まれはどこと？何が好き？趣味は？」

東京農工大学名誉教授 島田 清先生

◆十二月二十四日(土) 十三時～十六時

・クリスマスマリリンバコンサート

マリリンバ奏者 林 美里先生

※仏教講座はしばらくお休み致します。

鎌倉禅研究会のお知らせ

学びを継続しています。日本の禅は鎌倉で産声をあげました。建長寺入山料五百円、資料代五百円。予約不要です。

◆第一七七回 九月二十九日(木) 会場 建長寺

「禅宗の説法―上堂とは何か―」

鶴見大学講師

徳善寺住職 尾崎 正善先生

・「遣明船と五山禅僧」

東京大学史料編纂所准教授

岡本 真先生

◆第一七八回 十月二十日(木) 会場 建長寺

・「中世寺院と和食文化」

地方寺院の食品技術

明星大学准教授 芳澤 元先生

・「お茶の世界」

―三幡一対と三具足・五具足の成立―

京都造形芸術大学講師 橋本 素子先生

◆第一七九回 十一月二十四日(木) 会場 建長寺

・「建長寺と蘭溪道隆禅師」

宗禅寺 高井 正俊和尚

・特論「蘭溪道隆禅師語録を読む」

花園大学特任教授 衣川 賢次先生

◆第一八〇回 十二月八日(木) 会場 建長寺

・「大鑑清規研究報告」

禅居院住職 山名田 紹山和尚

・「蘭溪道隆禅師の公案」

足利大学講師

福巖寺副住職 采澤 良晃和尚

宗禅寺毎月の活動

―お寺で新たな自分の発見を―

- 朝粥坐禅会…毎月第一日曜日 朝6時～8時 坐禅後に禅の食事作法に則ってお粥をいただきます。禅の作法は元々熟食です。予約不要です 10/2 11/6 12/4
- 土曜坐禅会…毎週土曜日 子供：18時～19時 大人19時半～20時半 足にご不安の方には、イス坐禅もご用意です。予約不要です。
- 彼岸早朝坐禅会…彼岸中(9/20～9/26) 毎朝6時～7時開催。鐘楼で鐘を撞きながら読経後、坐禅。
- 土曜講座…毎月一回開催の公開講座。毎回13時～16時。地域文化と財産の再発見に。
- 写経会…毎月1の日(1日、11日、21日) 13時～15時般若心経写経。支度片付けは全員で。
- 鎌倉流御詠歌…毎月第1第3火曜日13時半～15時 仏教のココロを歌に乗せて 指導：高井淑子
- 手打うどん教室…現在2クラス開講中。月一回。講師：島田辰夫先生 ※現在お休命中
- いきいきヨガ…毎月第1第3木曜日10時～11時 予約不要¥500 要大きめのバスタオル持参 講師：園部多恵子さん <https://www.instagram.com/tae.yoga/>
- リアルてらこや…毎月第2土曜日午前中 主催：らいむぎハウス 問い合わせ090-5542-6159 (水野)
- 木彫教室…毎月第1第3土曜日 13時～16時 講師：新井達矢先生 見学可能 仏像や能面を彫ってみませんか？ 月謝5,000円(道具、材料費は別途) 新井達矢先生ブログ <https://ameblo.jp/tapazyia-1982/>
- 俳句教室…毎月1回適宜。問い合わせ：中野つたえ 042-554-2444
- 尺八吹禅の会…毎月第1第3月曜日 19時半～21時頃 坐禅15分、練習60分 問い合わせ：坂井陵重 042-554-3273
- お寺deこころ相談…タロットを使用した心理セラピーです ハムサまで 毎月第一日曜日 13時～18時 要予約 090-6792-4784
- 新聞サロン…毎月第4土曜日 13時～14時 新聞を使って自分の世界を楽しく広げましょう。お子様のご参加大歓迎。要予約 鹿野川喜代美 042-554-7343 090-6549-0751
- ▲介護予防体操…健康体操をみんなで一緒にいきます。9月から会場はみんなの家です。毎週金曜日14時～16時
- 薬師講中・寺子屋委員会・護持会・女性サンガの会 ―活動中です―
- 禅センター・みんなの家 ご使用下さい □各会の会場：●宗禅寺 ○禅センター ▲みんなの家